

## 「神の御手」

ダニエル 6 : 28

May.17.2020

### ダニエル 6 : 28 (パワポ)

#### Preface

もともとの予定では、今日から旧約聖書の黙示録とも言われるダニエル書の後半部分、7章に入って行こうと思ったのですが、

今読みました6 : 28のこのたった1節に込められた内容豊かな話をしないで、7章に入っていくのは名残惜しいと思いました。

そこで、今朝は、このダニエル6 : 28から、ともに神の声を聞いていきたいと思えます。

#### Part One

このダニエル6:28を見ますと、ちょっと不可思議な書き方をしています。

あのバビロン帝国を打ち倒したペルシアの偉大な王キュロスでもなく、そのキュロス王によってペルシア王国臨時政府の王として立てられたダレイオス王でもなく、ダニエルが主語になっています。

偉大な功績を残した権力者である王を差し置いて、ある意味巨大帝国の一臣下でしかないダニエルが主語となって、「ダニエルは栄えた。」と書くんです。「ダレイオス王とキュロス王が栄えた。」とは書かないんです。

「栄えた」という言葉は、王にこそふさわしい言葉であるはずなのに、帝国の一臣下でしかないはずのダニエルを主語に、「ダニエルは栄えた。」と書いています。

国々の栄枯盛衰に着目して作られる普通の歴史資料や、教科書ならば、「ダレイオス王は栄えた。」とか、「キュロス王が栄えた。」という風に、世の力の象徴である時の権力者に焦点を当てた書き方をしますが、この6:28節は違います。

明らかに視点が違います。

世の国の栄枯盛衰に焦点を当ててるのではなく、神の国に属する人の栄えに焦点を当てます。

神の国に属する人に焦点を当てるということは、この世での神の国の繁栄に焦点を当てていることにもなります。

## Part Two

神の国とは、死んでから行くところでもあります、それがすべてではありません。

もうすでに神様が統治し、主なる神様の主権による統治領域を意味しているのが、神の国です。

お金で行けるところでもなければ、能力で行けるところでもありません。

主イエス様を信じて、新しく生まれたならば、すぐにでも広がっていくのが、神の国です。

つまり、私たちが生きているすべての領域において、主イエス様を告白すること、主イエス様の御言葉を生きるならば、そこが神の国です。

神の国とは、神様の統治領域を意味する言葉ですから、主なる神様が私の家庭を治めるならば、そこが神の国となりますし、私の心を治めてくださるならば、そこが神の国になりますし、人生の多種多様なすべての領域を治めてくださるならば、そのすべての領域が、神の国に変わるわけです。

説教後の応答の賛美で歌いますが、聖歌467の歌詞の通りですね。

### 聖歌467の1節、3節の歌詞（パワポ）

“悲しみ尽きざる浮き世”という現実世界を、与えられた信仰一つで、生き抜いた人に、その喜びを永遠に延長させてくださるのが、死んでから入る天の御国ですね。

聖書に、神の国とは、死んだ後に行くだけの国と表現したことはありません。

むしろ神の国とは、実質的に、実存的に、私の人生の中に、今日も望んでいるものだと言います。

主イエス様が、本当に私の人生を治めておられるならば、私の中にある不安、痛み、劣等感、傷、数多くの怒り、このすべてのものが、主の統治と主権の下、屈服したということです。

まさに、私の人生が、神の国に変わるということです。

そして、イエス様御一方だけを見上げて、手ごわく、なかなかままならない今日という現実を、十分に突破していく力を、私が得たということです。

そのように生きる人たちは、イエス・キリスト御一方だけを、私の人生の宝とし、世の中がひっくり返ろうとも、イエス様御一方だけを見上げながら、突破し

ていく力をもって、日々、神の国を生きる練習をする人たちです。

その人たちに、地上での歩みを終えて死ぬる日、主がこうおっしゃいます。  
「延長してあげるよ。永遠に！」

主イエス様をただひとつの宝として、生きていく人の人生に、永遠に広がって  
いくのが、神の国であり、天の御国です。  
だから、信仰に卒業なんかありません。

### Part Three

また、その反対に、この人生を神様の統治なしに、イエス・キリストを私の人生の宝とせず、一生を生きるならば、どうなるのでしょうか？

終わりなき競争をしなければならず、その競争社会の中で果てしなく不安を抱き、明日に向かって不安を抱き、平安と平和はなく、人と自分をひたすらに比較する蟻地獄のような競争心理と、

今日、私が所有した物を、もしかしたら、明日には失ってしまうかもしれないという不安に苛まれます。

それだけでしょうか？

私たちが、私たちの想像を遥かに超える罪を、私の人生の中で犯してしまった時、私自身でも、私という人を受け入れることさえ出来なくなってしまうのです。

もう生きていくこと自体が、地獄になってしまいます。

イエス・キリストを私の主とせず、もし何の問題もなく、精神や心に異常をきたさずに生きることが出来るならば、もしかしたらそれは、「人生を良心的に生きていない」ということかもしれません。

「鬱々とししないで、人生なんか生きられない」というのが、私たちの現実です。

イエス様を信じずに生きる人生は、地獄以外の何物でもありません。

もし人生にこんなことは感じていないというならば、それは、自分にうそをついていることであり、現実を素直に見ていないことであり、人生を目まぐるしくして誤魔化しているのかもしれませんが、まだ本当の意味で、挫折や絶望を経験していないのかもしれませんが。

### Part Four

先週まで見てまいりましたが、ダニエル6：28にその名前が出てくるダレイオス王は、まさに、主なる神様を信じずに、地獄のようなところを歩んでいまし

た。

権力が、彼を癒やすことは出来ませんでした。

富が、彼を守ることも出来ませんでした。

人から羨ましがられるものを、すべて持っているようでも、鬱々とした地獄のような人生は、決して変わることがありませんでした。

巨大帝国の王であっても、いつその帝国が立ち行かなくなるのか分からない不安ばかりか、自分の立場もどうなってしまうのか分からない不安に駆られました。

臣下たちは、自分に向かって、「王様、永遠に生きられますように。」なんて言うけれども、永遠に生きられないのは当然、目に見える王位や帝国でさえも、永遠に続くはずはないということは、薄々感じています。

そんな折、出会ったのがダニエルです。

神の主権と統治を自分の人生の全領域に認め、永遠に滅びることのない神の国を生きた神の人、ダニエルに出会ったんです。

そして、ついに、やがて、ダレイオスの口を突いて出て来た言葉が、先週の聖書箇所6：26です。

### ダニエル6：26 (パワポ)

見てください。

ダレイオスは、「私の支配する国」と言います。

「私の支配する国」は、限りがあるけれども、ダニエルの神の国は、なんて言います？

「その国は滅びることがない」って言うんです。

ダレイオスは、限りのある「私の支配する国」において、限りのない決して滅びることのない神の国を知り、神の国を認め、神の国を告白するようになるんです。

じゃあ、私たちは、日本における神の国を生きているのでしょうか？

アメリカにおける神の国、中国における神の国、韓国における神の国、どこだっているんです、この世における神の国を生きていますか？

政治家や有力者たちを含めた色んな人たちが、自分たちの国はあたかも滅びないかのように言いますが、主イエス・キリストの主権と統治を認める神の国以

外は、すべて滅びます。

## Part Five

28節に出てくるもう一人の王、キュロスですが、このキュロス王も、神の国を宣言する人となったことが聖書に記されています。

**歴代誌第二36：22-23 (パワポ)**

**エズラ記1：1-7 (パワポ)**

あの偉大なバビロン帝国を滅ぼしたキュロス王が、まず第一にしたことが、主なる神様を礼拝する神殿・神の宮を、ユダの民たちを70年ぶりに帰還させて、建築させることでした。

先週まで見てきましたが、甥っ子キュロス王と、母方の叔父にあたるダレイオス王との間には、親戚同士ではあったものの、権力者同士の微妙な力関係がありました。

なのに、その力関係で、互いが互いにいがみ合って、殺し合うなんてこともなく、(エズラ6章を見ますと)むしろ、共に、天の神をほめたたえ、共に、神殿建築を遂行する仲になっているんです。

**エズラ6：13-14 (パワポ)**

アルタクセルクセスというもう一人の王の名前も出てきますが、今、ここに書いてある通り、キュロスとダレイオスは、協力して、エルサレムの神殿建築に携わったことが分かります。

キュロス王も、ダレイオス王も、バビロン帝国を超えるペルシア帝国の権力者でありながらも、永遠に続く神の国に思いを馳せて生きてたろうことまで、想像してしまいます。

聖書には、はっきり書いてはないので、はっきりとは言えませんが、ダニエルの生き様が、ダレイオスのみならず、キュロスにも影響を及ぼし、

二人の仲を取り持ち、また二人を信仰へと導いたのが、ダニエルだったという想像を膨らませることも出来ます。

臣下たちの狡猾な反逆行為をダニエルの信仰によって、打ち破ったダレイオスが、キュロスにそのことを話さなかったはずはないですね。

この二人の関係に、ダニエルが、影響を及ぼしていることは確かな事実でしょう。

そればかりか、ダニエルは、主によって霊を奮い立たされたキュロスと、ダレイオスの協力まで引き出して、自分の民族、同胞のイスラエルの民たちに、70年ぶりに故郷に帰還するという事業にまで、大きな影響を及ぼしました。

国を失って捕虜となったという民族の傷と痛みの癒しと回復までも、ダニエルという一信仰者が、関り、影響を及ぼしたのです。

ダニエルという一人の人の信仰が、民族を癒やし、救ったのです。

そして、目に見える権力に翻弄された人たちに、まだ目には見えないけれども、決して、滅びることのない神の国を伝え、示し、信仰へと導いたことがわかります。

だから、

### ダニエル6：28 (パワポ)

んです。

目に見える帝国を生きた王よりも、目には見えない滅びることのない神の国を生きたダニエルの繁栄、栄えこそ、真の繁栄です。

先ほどから、神の国は目には見えないと言っていますが、厳密に言えば、見えません。

人を通して、人の人生に、目に見える形で、神の国が現れるのです。

たった一人の信仰者が、主イエス・キリストを見上げ続けながら生きることをもって、国を導き、民族を導き、王を導くのです。

日本のクリスチャン人口が1%に満たないなんてことを嘆き、委縮している場合ではないですね。

たった一人の神の人が、国を変えるんです。人を変えるんです。民族を癒やし、人々を癒やすんです。

## Part Six

人の（作る）歴史は、“世の覇権、力の推移を記録したもの”とも言えるかもしれません。

つまり、どの人からどの人に、どの民族からどの民族に、どの国からどの国に、どの組織からどの組織に、どの企業からどの企業に、どの分野からどの分野に、力が移って行ったのかを記録したものが、人の作った歴史です。

その主体は、いつも、世の力を掌握しようと野望を抱く人間です。  
人間が主体です。  
人の作る歴史は、人間の栄枯盛衰ですね。

でも、問題は、栄枯盛衰と言いますが、すべての覇権や力は、栄や盛ではなく、必ず、枯や衰で終わるということです。

つまり、すべての世の力は、盛んに栄えて終わることはなく、必ず枯れて衰えて終わります。

人の歴史を脚色せずに、正直に見るならば、枯れて衰えていくベクトルに抗う人間のあがきであり、もがきです。

そして決して、枯れて衰えていくという事実には、抗い切って、果てしなく続く覇権や力を保ち続けた人もなく、民族もなく、国もなく、組織もなく、企業もなく、分野もありません。

脚色せず、正直に人の歴史を見るならば、すべて、例外なく、枯れて衰えて終わります。

人が神の前に罪を犯して、エデンの園から追放されてから作ったどんなものも、枯れて衰えて終わりましたし、これからも終わります。

なのに、どの時代も、紀元前だろうが、21世紀だろうが、あたかも、決して枯れて衰えることはない境地があるかのように、思い思わせ、教え教えられ、洗脳し洗脳されながら、世の中を回し回され、ここまで人は、歴史を刻んで参りました。

このような歴史観には、確かにまやかしがあるにもかかわらず、まやかしだけを綺麗に濾して（濾過）、歴史を美化し、人物を美化し、美化したストーリーを書物にし、映像にして、

「まだまだ人間やれるんだ！ 過去の過ちや失敗は、これからの人の努力で必ず克服できるし、克服した暁には、栄光が待っている！」と、言います。

もちろんこれまで、神の与える一般恩恵として、克服し、与えられ、享受してきた恵みもありますが、神を認めず、人の力ばかりに頼るならば、その恵みも枯れて衰えて、終わります。

でも、そんなことは露知らないかのように、教育し、啓蒙し、宣伝し、賞を与え、すごいと褒め続け、消費し、消耗し、わけわからなくなったら、自分が接することの出来る狭い世界に閉じこもって、これで良いんだと、互いに励まし合い

ながら、世の中回してきました。

そして、悪が悪とも感じなくなり、善が善とも思えず、ただひたすらに、目に見える物質だけを追いかける世界を、継続して、つくり上げてきました。

## Part Seven

そんな中での、今回のコロナの事態です。

このコロナウィルスによって、世界の動きが止まりました。

最近になって緊急事態宣言が解かれた地域や国も出来てきましたが、地球の70億の人口のうち、40億の人々が、以前の生活から断絶され、一種の隔離状態での生活を強いられました。

全世界の学校が、会社が、教会や寺院が閉じられ、オンラインで仕事をし、オンラインで授業をし、オンラインで礼拝をささげることが、急速に一般化しました。

そして、私たちが支配していたこの空間と世界が、一瞬にして崩れていく様を目撃しました。

富む者も、貧しい者も、有名人も、無名の人も、大国の首相も、皇太子も、感染の危機を免れることは出来ませんでした。

人が歴史を刻みながら建て上げてきた力は、何の効果も及ぼすことが出来ませんでした。

そしてついに、コロナウィルスは、人が積み上げ、作り上げてきた世界を止めました。

ある意味、コロナウィルスは、誰も成すことが出来なかった世界を止めるという、とてつもないことをやってのけました。

地球規模の揺さぶりを起こしました。

災難や災害や紛争や戦争などで、特定地域における揺さぶりは、これまで何度も経験してきましたが、これほどまでの地球規模の揺さぶりは、もしかしたらノアの洪水以降、初めてなのかもしれません。

じゃあ、この地球規模の揺さぶりの主体は、誰でしょうか？

ウィルスは主体ではありません。 道具です。

この地を揺り動かす道具でしかありません。

今回は、地を揺り動かす道具として用いられたのがウィルスでしたが、次の揺さぶりの道具が何なのかは、私たちには、正確に言い当てることは出来ません。

クリスチャンならば、この揺るがしが、どこから来たものであるのかを直感的に察知できますよね。

そうです。神様です。天地万物をお造りになり、そのすべてを統べ治めておられる主なる神様、御父、御子、御霊なる三位一体の神様です。

まさしく、いと高き神様が、この地を揺さぶっておられるのです。

### マタイの福音書 10 : 29

雀の一羽でさえ、あなたがたの父なる神の許しなしに地に落ちることはありません。(パワポ)

とありますように、神様は、雀一羽でさえも、何の理由もなく、地に落とすようなことはなさいません。

しかるならば、全世界を揺るがしているこのコロナウィルスの事態を、主なる神様が関与しておられないわけがないですね。

いや、神様がこのような事態を許され、また、私達に与えなさいました。

聖書を見ますと、神様が世界を揺るがしなされる警告と記録が、様々なところに出てきます。

いや、聖書の記録全部が、そう（神様が世界を揺さぶっておられる記録）だと言っても、過言ではないぐらいに、大なり小なり、多かれ少なかれ、ずっと世界を揺さぶり続けておられます。

## Part Eight

一度もお会いしたこともないのですが、私が勝手に尊敬している John Piper というアメリカの牧師先生がおられるのですが、その John Piper 牧師が、つい最近（4月に）「コロナウィルスとキリスト」という本を執筆されました。

その本の中で、John Piper 牧師は、「神様は果たして、コロナウィルスを通して、何をなさっているのだろうか？」という質問を自ら投げかけて、その質問に対する6つの答え提示しました。

まず一つ目は、他の災難と同じように、コロナウィルスを通して、神様は、世界の人々に、まことの神を見くびる罪の霊的醜悪さと、悲惨でむごたらしい倫理道徳的に崩壊した現実世界を、絵画のように見せておられる。

2、いくらかの人々は、その悪質な態度と行いのゆえに、神様の特別な裁きを受け、コロナウィルスに感染することもあるだろう。

3、コロナウィルスは、キリストの再臨を準備しなさいという神様の警鐘である。

4、コロナウィルスは、私たち皆が悔い改め、キリストの無限の価値に照らし合わせ、生き方を再構築しなさいという、神様の雷鳴のような呼びかけである。

5、コロナウィルスは、クリスチャンたちが、自己憐憫と恐れを克服し、勇気と喜びと愛によって、善を成し、神に栄光を帰すようにという、神の呼びかけである。

6、神様は、コロナウィルスを通して、全世界の現在に安住しているクリスチャンたちを目覚めさせ、新しく急進的なことが出来るように解き放ち、福音を信じない世の人々に、キリストの福音を宣べ伝えるようにされる。

**John Piper** 牧師は、神様はコロナウィルスを通して、「罪深き世界の現状をあからさまにし、神の裁きを施し、世に終わりがあることを知らない人々へ警鐘を鳴らし、キリストを土台とした人生の再構築を促し、クリスチャンたちを覚醒させ、今こそ、主イエスを時が良くても、悪くても、忍耐をもって、キリストの福音を宣べ伝えさせよう。」と、しておられると言います。

これこそ、神の国の視点です。

これが、今という現実世界を、“世の力や派遣の推移”という視点で見るとはなく、“ダニエルは栄えた”という視点で見ることです。

神の御手が、どう働いておられるのかを、深く御言葉により頼み、深い祈りを通して与えてくださる、決して滅びることのない神の国の視点です。

このダニエルは、この視点を・観点を・霊的洞察力をもって生き、栄えました。

### Conclusion

みなさん、栄えたいですか？ 繁栄したいですか？（私は栄えて、繁栄したいです。）

ならば、主イエス様だけを宝として、主イエス様だけに焦点を当てて、主イエス様だけを見上げて、主イエス様と共に生き、主イエス様に従って、主イエス様の与えてくださるくびきを負って、自分を捨て、神の国を生きてください。

そうすれば、神の国の繁栄が皆さんに、私たちに及びます。

そして、神の国の繁栄を味わい、幸いを体験します。

決して滅びることのない、神の国に生きているという喜びが、魂の底から泉のように湧き上がってきます。

曇った視野が晴れ、よどんだ気持ちが晴れやかになり、絶望の内にも光を見出すことができます。

主イエス様を信じてください。

主イエス様をまことに信じてください。

主イエス様だけを宝としてください。

そうすれば、「ダニエルは栄えた。」という恵みを受けます。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル6：28